

慈濟 240 ものがたり

慈濟基金會
2016 年 12 月

TZU CHI ● ツーチー

2016 ● 12

慈濟ものがたり

N O 2 4 0

慈濟基金會

今日の表紙

慈濟ボランティアは今年10月までに、彰化刑務所の全ての区域で「大願堅志で人生を変える」と題した講座を10回行ってきた。受刑者が麻薬の誘惑に打ち克ち自分の人生に希望を持てるようにと願う。

(撮影・黄筱哲)



表見返し ●

文・證嚴法師／訳・済運／撮影・李白士

福を集めて災いを消す

善と悪が綱引きしている時

衆生の善で導く

甘露の水滴が集まれば

清流と化す

己の能力を過小評価せず

奉仕を実行する

心の浄化は福を集め

災いを消す



目次

【社論】

愛の力で麻薬を撲滅する

慈願／訳 4

【主題報道】

麻薬を拒絶する偉丈夫

◆好奇心が始まり

済運／訳 10

◆刑務所から総統府まで

済運／訳 14

◆友の勧告を聴いて

慈願／訳 28

◆薬物は薬にあらず無用な物

黒川章子／訳 34

【人文風景】

僻地に愛を届ける動く城

黒川由希／訳 44

【證嚴法師のお諭し】

福を修め、日々米蔵に米を蓄えるようなもの

慈願／訳 64

知恵を働かせば、小さな種も天地を内包している

【健康ボックス】

痛風の患者は大豆製品を食べられますか？

慈昶／訳 76

【ボランティアスケッチ】

慈善の家政婦

済運／訳 80

【衲履足跡】

強い意志で欲念を克服しよう

心嫻／訳 92

【法を聞く心得】

靴を失くして

翁俊彬／訳 100

慈濟大事記【十、十一月】

済運／訳 105

福を集めて災いを消す

済運／訳 表見返し

漫画・『清らかな知恵』

済運／訳 裏見返し

愛の力で麻薬を撲滅する

ある中年男性が、母親と花蓮の静思精舎へボランティアにやって来た。朝会の時、證嚴法師の開示を聴いていたこの男性は、落ち着かない様子である。しばらくすると彼は上人の前に出て跪き、涙を流しながら「家へ帰ったら必ず麻薬を断ちます」と懺悔していた。上人は彼の肩を軽くたたいて、「志を堅くもってこの苦しみを通り過ぎた時には、新たな人生に向かって再出発できますよ」と励まされた。

二カ月後、彼は再び精舎を訪れ、上人の前で、近頃ボランティアに参加していた時に見聞きして心得たことを話した。上人は彼に麻薬をしていた時は

どんな感じだったかと聞かれた。彼は自分が麻薬を断ち切ることを実証して、現在呼びかけている麻薬撲滅キャンペーンの力になることを誓った。

十三年前のことである。彼はもともと安定した職に就いていたが、悪い友人と付き合い始めてから、アンフェタミンという薬物に手を染めた。アンフェタミンを摂取すると、活力が漲り、仕事の刺激になつて健康にも良いと勧められて始めた。今は家族の支持と自分の堅い決心によって、終に立ち直ることができたのだ。

一九九〇年代から、台湾では麻薬が氾濫し、それにもなう犯罪が社会問題化していた。アジア太平洋航路の中心である台湾では、国際的麻薬組織が取引を行うようになり、麻薬が滲透していった。それに加えて、経済発展に伴って高度な競争社会となり、麻薬がプレッシャーから逃避するための手段になつていった。

台湾の町はずれで一時、電線窃盗案件が頻発したことがある。三年の中に

盗まれた電線は台湾を二周するほどの長さだった。当時、世界で銅の価格が上昇していたので、麻薬常習犯は高圧電線の危険も顧みず、電線を盗んでは銅を切り取って金に換え、麻薬を買っていた。警察が窃盗犯を取り調べていた時、意外にも麻薬の汚染は都市部よりも田舎の方が深刻であることを発見した。

人影のまばらな場所は麻薬を隠すのにもってこいの場所である。とくに、船が行き来する辺鄙な港は麻薬や原料を密輸する格好の場となっていた。現地の住民は麻薬被害に対する認識と麻薬中毒と中毒からの更生に対する認識が低かった。「麻薬はどこにある？」と聞けば、「ここにあるよ」と言う調子でたやすく手に入るため、麻薬常習者が増加していた。

麻薬関連の犯罪者で台湾の刑務所は満員になり、たとえ刑務所を出ても、正常な社会生活に戻るのには非常に困難だった。肉体を蝕んだ中毒から離脱するのは難しく、それに加え社会では排斥されるため、多くの者はまた麻薬の

道に戻ってゆく。

麻薬常習者は家族を傷つけ、家庭の倫理を壊す。二〇〇九年、衛生署の調査によると麻薬常習者の人口は年少化し、学校内にまで麻薬が入り込んでいることが分かった。家庭内の不和や勉強といったストレスを感じている学生は、麻薬の危険にさらされていた。

どのようにして麻薬常習者を更生させるか、誘惑を拒絶できるかは、現在、台湾社会にとって重大な課題になっている。法務省は七年前から慈済と共同で「麻薬にNOと言える私」というスローガンを掲げて、慈済教師連合会が麻薬防止ボランティアを訓練している。このボランティアの中には麻薬からの更生に成功した者もいて、彼らは全身全霊で協力している。

慈済ボランティアは今年十月までに、彰化刑務所の全ての区域で「大願堅志で人生を変える」と題した講座を十回行ってきた。受刑者が麻薬の誘惑に打ち克ち自分の人生に希望を持てるようにと願って、一人でも多くの受刑者にこの講座に参加するよう励ましてきた。

麻薬を拒絶する偉丈夫

銃も装甲車も必要ない。わずか数グラムの粉末によっ

て、家庭が崩壊したり人が死んでしまう。これが恐るべき麻薬の威力である。

被害者は麻薬中毒者とその家庭だけではない。台湾の麻薬常習者は年々増え、若年化している。禁止薬物使用罪で収監されている人の数は刑務所で最多を占めている。麻薬中毒の禁断症状が犯罪を引き起こし、社会に戦場が存在していると見える。「毒」という字は「無」と「主」を組み合わせたもので、毒に触れると制御が効かなくなり、自分を見失ってしまう。

慈済ボランティアは長年未然に防ごうと麻薬撲滅を宣伝してきている。麻薬を拒絶してこそ偉丈夫なのである。



好奇心が始まり

◎文・李委煌 訳・済運 撮影・黄筱哲

中学生の時、人と違うことをしたくて変わったタバコを吸ってみた。タバコを吸う習慣が麻薬中毒の前兆だとは、当時も思ってもみなかった。

●高肇良は麻薬に手を出したために学校を中退し、服役したが、彼は過去の負の人生を現在の資産に転化し、積極的に麻薬防止活動に力を入れている。

中学生の時、好奇心からアンフェタミン（覚醒剤）を使用した。

青春時代に人と違ったことをしたいと思い、普通の人が吸うタバコでは面白くない。同級生がアンフェタミンを混ぜたタバコを持ってきたので吸ってみたら、とてもハイな気分になった。初めのうちは同級生がただくれたが、やがて買うことになり、値段は安かった。その当時はタバコを吸う習慣が麻薬中毒の前兆になるとは思ってもみなかった。

先生が授業をしている時に教科書を机に立て、ライターでアルミ箔に乗せた粉に火をつけると煙が上がった。初めはタバコのように吸っていたが、やがて鼻から吸うようになった。

アンフェタミンを吸い始めてから、眠れなくなると同時に幻覚が生じるようになった。その症状を抑えるために、十八歳からヘロインを注射するようになった。その年、初めて薬物所持で逮捕され、四カ月刑が下された。それから十数年間、刑務所を出たり入ったりした。

両親は共に純朴な農民で、自分が友人から「ジャンキー」と呼ばれていること



が信じられなかった。そして、更生施設の中で自分が何の価値もない生き物であることに気づき、狼狽した。

同じ監房には二種類の人が入っていた。一級危険薬物であるヘロインの常習者と二級危険薬物であるアンフェタミンの常習者である。更生（離脱）過程では、アンフェタミン中毒者は眠ってばかりいて、目が覚めると食べ、食べ終わるとまた、熟睡する。収監されて十日ほどで数キロ体重が増える。

一方、ヘロイン中毒者は最初の一週間程は眠れず、食欲もない。そして、体中が痛んで鳥肌が立ち、時を選ばず嘔吐と

下痢を繰り返す。食事を差し入れてもアンフェタミン中毒者が食べてしまう。

双方の中毒者は自然に部屋を二分してごろ寝する。少しでも私たちの苦痛を和らげてくれるのは冷たい水を浴びることだった。冷水を浴びると毛細血管が収縮して苦痛が和らぐ。その時、アンフェタミン中毒者は私たちを思いやり、先に冷水を浴びさせてくれた。

そういう強烈な「禁断症状」は一般的には、五日間から七日間持ちこたえれば楽になるが、中には気を失ったりショック状態に陥る人もいた。

しかし、これほどの苦痛を味わっても、

薬物が欲しいという考えが脳裏から離れられないのだ。

目先の苦痛を和らげるために 人格まで失う

何度目かに出所した時、母は家に鉄格子の扉を取り付けて、私が外の世界と関わりを断つことで薬物と縁を切らせようとしたことがあった。当時、私は幻覚と幻聴に悩まされ、体重は四十キロほどにまで落ち、鉄格子の隙間から抜け出て麻薬を探し求めこともあるが、そこから中に入ろうとした時は入れなかった。

麻薬を繰り返し、何度も刑務所に入った。父に勘当されて路頭に迷っても、麻薬を追い求めた。一時的に禁断症状を抑えるための欲望はとても強く、親を裏切っても手に入れたいほど強烈だった。そして、例え、どぶの水を使ってもヘロインを注射できるならそれでもよく、早急に禁断症状から抜け出ることが最重課題だった。

麻薬中毒でどんなにみつともなくても構わなかった。肉体的中毒は断ち切れても、精神的に断ち切るのが難しかった。家や刑務所に閉じ込められても、心の牢屋ほど辛いものはなかった。

刑務所から総統府まで

◎文・李委煌 訳・済運 撮影・黄筱哲

高肇良は刑務所を出た後、時々悪夢にうなされて目覚める。自分がまた刑務所行きの車に乗せられた夢である。

ほんの一時葉に手を染めたために、一生更生し続けなければならない。麻薬拒絶の講座は毎日が彼自身に対する警告である。

昨年、総統自らが「旭青賞」を授けてくれた。彼は今でも気を引き締め続けている。

ているほかはスローガンが書かれたポスターだけの鉄格子扉で施錠された教室に座り、静かにボランティアが来るのを待っていた。彰化刑務所には二千五百人を超す受刑者が服役しているが、その半数以上が麻薬危害防止条例に違反した者である。

壇上で慈済ボランティアの高肇良が自分の麻薬中毒と服役の経歴、家族の気持ちなどを話した。聴衆の受刑者たちは珍しく静かに聞き入っている。講演している人が「自分を理解してくれている」と感じたからだ。

二〇〇九年の初夏、高肇良はこの刑務

厳しい面持ちの彰化刑務所の刑務官に連れられて、彰化慈済ボランティアは施錠された鉄格子の扉を幾度もくぐり抜け、第七工場の大教室に着いた。鉄格子が入った窓や扉は麻薬中毒者にとっては彼らを「保護」するやむを得ないものであると同時に、彼らを社会から隔離するものでもある。人としての尊厳と自由も鉄格子の中に閉じ込められた感じた。

百人余りの受刑者はみな同じ白いTシャツに紺の短パン姿で、扇風機が置かれ

所から出所した。三十四歳だった。この数年間、彼は異なった身分でボランティアと共に再びこの刑務所を訪れた。刑務所内の十二の工場を回って講演し、刑務所と受刑者から「高先生」と呼ばれるようになった。

高先生は家路を急ぎ菓子売る

人生が脇道に逸れたが、幸いに崖っぷちで止まることができた。高肇良は自分の不甲斐なさを曝け出すことで精進し、講演を続けた。かつて服役していた雲林刑務所、台中刑務所、南投刑務所、そして、

從監獄到總統府

路我這樣走過-高肇良生命故事



● 刑務所や少年院に入ると、高肇良は心が痛むと同時に願が頭に浮かぶ。痛むのは若くして世間知らずだった過去の人生への後悔から。今、新たな人生を大切に、感謝の気持ちである。彼は自分の人生の話を聞いた受刑者が戒めとし、再び麻薬に溺れて人生を台無しにしないよう励ましている。

薬物に手を染め始めた時に通っていた母校の中学校にまで足を伸ばして講演した。「私を見て、自分にもできるのだと信じて欲しい」と励ましてきた。

講演の対象が刑に服している受刑者であれ、学校に通う学生であれ、講演を依頼されれば、彼はボランティア

と医者に言われたが、彼は気力で以てその宣告をひっくり返したからだ。

高肇良と妻の謝舒亜は故郷の彰化県の永靖街でリュックサックを売る店を開いた。愛玉子ゼリーや菜食の菓子類も一緒に売っている。彼は講演前夜には講演の準備をするだけでなく、愛玉子を洗って、砂糖を炒めておく。次の日、講演が終わると急いで帰り、店を開くためである。麻薬中毒者が社会に復帰して仕事を得るのは容易でないことを彼はよく知っている。彼はお菓子類を売って、利益の一部を更生者を支援する基金に寄付している。

イアと共にできる限り時間を作って行くことにしている。ここ数年来、刑務所や少年院、学校、地域社会などで三百回を超える講演をしてきた。今年の一月から九月までだけでも百回を超え、彰化のボランティアは事前の宣伝に延べ三千人余りを動員した。

学校が夏休みに入る前の五月だけで、彼は二十五日間講演した。以前、薬物を使って恍惚状態で交通事故を起こし、喉の気管が破れたため、今でも講演が続くと声がかすれる。しかし、彼は講演できる縁をとっても大切にしている。それは当時、一生、経鼻胃管を使用した生活にな

●高肇良は出所後、積極的にボランティア活動に打ち込んだ。謝舒亜は彼の努力と前向きな姿勢を見て彼との結婚を決めた。そして一緒に慈済ボランティアになった。この日、彰化刑務所で講演するために2人は朝早くから家を出た。



だった慈済ボランティアの蔡天勝に感化され、正しい道を歩み出すことができた。この数年間、彼は蔡天勝の手法に習い、各地で講演する以外に、数多くの受刑者と文通して彼らを励まし続けてきた。

高肇良の手元には七、八百通の手紙があるが、それらは花蓮刑務所や彰化刑務所、台中刑務所から送られてきたものである。月に二、三十通来るが、彼はほとんど自筆で返事を書いている。「全ての

●高肇良と謝舒亜はボランティアの仕事が終わると、すぐに家に帰って店を開く。店にやって来る学生が「僕は麻薬撲滅隊員！」と言えば、冷たい愛玉子ゼリーをこ馳走する。

麻薬に手を出すことは
親を最も悲しませること

高肇良は講演が終わると必ず聴衆の一人ひとりと握手する。握手することで手の温かみを通して、「途絶えることのない関心と祝福」を伝えたいのだ。その温かみが変化をもたらすきっかけになるかもしれないと彼は思う。

更正するなら刑に服している今から始めるべきであり、出所するまで待つ必要はない。刑務所も小さな社会なのだから、と高肇良は受刑者を励ます。彼自身も出所する前、やはり麻薬中毒の更生者





麻薬防止六カ条

- 1、規則正しい生活
- 2、正しい感情を抑える方法の習得
- 3、悪い場所に近づかない
- 4、知らない人から飲み物やタバコをもらわない
- 5、覚醒やダイエットは薬物に頼らない
- 6、絶対に好奇心で麻薬に手を出さない

い！」と老婆心で付け加える。

彼が最も心を痛めるのは、麻薬常習者の家族が彼の店まで支援を請いに来る時

手紙は出所後の新たな人生を意味しており、更生して欲しいという子供への家族の最後の思いでもあるのです」。それ故に、彼はどの手紙も重く受け止め、じっくり考えて返事を書いている。

華やかな青春時代の十数年間を麻薬中毒で何度も刑務所を出入りした高肇良には、受刑者が手紙を受け取る時の気持ちがよく分かる。「いまだに誰かが自分のことに関心を持っていてくれる」。手紙の中で、親に顔向けできなかったり、世話する人がいない高齢の親を思う文面を見ると、彼はボランティアと個別にその家庭を訪問する。時には受刑者の家庭が

経済的に困難状態にあったり、病気になっているのを発見することもある。その場合、積極的に慈善基金会の社会福祉人員に通報し、実情に合った補助を提供したり家庭訪問を行っている。

麻薬が貧困や病を引き起こす事例を高肇良はたくさん見てきた。その多くは刑務所に入ると、直接的あるいは間接的に家族の生活が困難な状況に陥る。心優しい高肇良は彼らの家庭状況を確認したり要望を達成してから、すぐに受刑者に返信を書く。彼らに、安心して服役し、将来、親孝行するよう伝える。そして、必ず、「出所したら二度と戻って来てはならな

だ。その多くが親である。ある夫婦は高肇良の講演を聞いたことがあり、わざわざやって来た。母親は泣き通しで、父親は黙っていた。台北で働いている子供が麻薬に手を染めた。彼らは麻薬を見たこともなく、どうやって子供を更正させたいのか分らなかった。

両親は愛で以て付き添ってきたが、子供はいつもお金を盗んでは麻薬を買った。麻薬が常習になって何年にもなるなら法に裁かれることを、高肇良は提案した。さもないければ、苦痛は際限なく繰り返されるだろう。

同級生はいるだろうか？

高肇良が刑務所で講演した時、小学校や中学校の同級生や、服役していた時に知り合った友人に偶然出会った。その数は十人を下らない。そこから麻薬が際限なく人々を陥れていることが見て取れる。麻薬を買うために盗みや強盗をしたり借金するが、借金しても返す当てはない。「家がどんなに金持ちでも、いつかは麻薬で何もかもなくしてしまいます」。麻薬中毒は個人の健康を害するだけでなく、社会問題にまで発展する。

麻薬常習者の八割の家庭はそういう間

題に遭遇している、と高肇良は言う。お金がないために家族を殺めたり、「果ては中毒者や親が、耐えられずに自殺に追い込まれるのです」と話す。

長期間、仮釈放された麻薬中毒の更生者に付き添うことは、「干上がった土地で植物を育てるようなものです」と高肇良は言う。種を蒔いたらその成果が見えるわけではなく、励ましと包容力で根気よく付き添っていくしかないのだ。時には受刑者と長年に渡って文通し、出所した後は引越しや職探し、社会に復帰するための日常生活を取り戻す手伝いをするが、「しばらくするとまた元の本阿弥



●肩を叩き、背中をさすり、相手を理解して抱擁をしてあげる。高肇良の腕の中にある少年院の子供は彼の踏み誤った過去を思い出させた。耳元で「真面目に務めなさい。出たら二度と戻って来てはいけない」と囁いた。

です」と言う。高肇良は心が痛むが、気を取り直し、自分を信じるようにしている。「簡単に打ち負かされていたら、次の人に付き添って行くことはできません」

この三年間、彰化地方検察庁は毎月、刑期満了を迎える仮釈放の受刑者数十人を定期的に慈済のリサイクルセンターに来させ、資源の回収や分類などのボランティア活動に参加させている。中には刑期が終了しても、引き続きボランティアとして通っている人もいる。現地の慈済ボランティアは彰化県教育署の同意を得て、県内の二百十五カ所の小中学校で麻

薬撲滅の宣伝を行っている。

高肇良は彰化県麻薬危害防止を宣伝する講師に招かれているほか、普段から彰化県社会福祉課の職員と麻薬更生者を訪問している。また、彰化更生保護協会は無利息でローンを提供しており、心底から更生しようとしている人が高肇良に見習って愛玉子ゼリーの店を出す手助けをしている。

近年、麻薬は以前よりも氾濫しており、高肇良は心が重い。彼が中学生の時はアンフェタミンは刑罰に値しない三級危険薬物に指定されていたが、後に二級危険薬物に改正された。今、学生の間で

流行っている三級危険薬物のケタミンが将来、二級危険薬物に指定されたら、もっと多くの若者が刑事責任を問われ、前科を残すことになる。彼はそうなる前に、一時の好奇心から健康を害したり、法に触れることがないようになれば、と思っている。

全ての講演は自分に言い聞かせるもの

経験のある人はいつも「一時、麻薬に手を染めたら、更正するのに一生かかる」と言う。大衆に向かって自分のことを話

すのは勇気と願力が必要である。高肇良はそれを機に他人に警告を発すると同時に自分をも戒めている。

長年、福音厚生の旭光会を主催してきた劉民和牧師が言っているように、麻薬は「全人（その人の全て）」を破壊してしまい、時間と愛と忍耐があつて初めて更生に成功するのである。その道を歩むのは容易なことではない。

また、「道を急ぐ雁」という全人ケアセンターを創設し、出所した更生人に付き添っている劉昊牧師も、「麻薬を使い続けて二十年や三十年になる人は、更生にも十年や二十年かけて初めて成功する

●約7年前、高肇良（後列中央）は彰化二林刑務所を出所した。今は慈濟ボランティアたちと定期的にこの刑務所で講演し、「高先生」と呼ばれている。

と言えますが、完全に更生したと言えるのは死んだ時です」

高肇良は最後に出所した後、も時々、悪夢にうなされて目覚めた。夢の中で警察の車に座っていた。かつて母親が鉄格子の扉を作り、家に閉じ込めて更生させようとしたこと

がある。その期間、禁断症状のために大便秘を失禁し、母親がそれを始末してくれた。高肇良は両親が彼を見捨てなかったから、新たな人生を歩むことができた。感謝している。昨年、彼は麻薬更生者として麻薬防止活動に参加し、總統直々から「旭青賞」を受け取った。

高肇良は自分が歩んで来た道を大切にすると共に、自分の責任と使命を弁えている。「私が活動をやることは大勢の人を傷つけることであり、全ての人が自信を失うでしょう」。今、麻薬防止活動をしていても、彼は常に気を引き締めて自分に言い聞かせている。



全国自治体麻薬防止センター
更生ホットライン：0800-770-885（台湾）
または、衛生福祉部指定の薬物中毒治療医療機関の薬物中毒更生科もしくは精神内科での診察を勧める。



友の勧告を聴いて

◎文・李委煌 訳・慈願 撮影・黄筱哲

麻薬を売って稼いだ金で母に孝行した母は「汚れた金なんかいらぬ」と突っ返した。その言葉を聞いて苦しかった。家の暮らしをよくしようと思っていたが、それが多くの家庭に危害を及ぼしたことを知らなかった。

今は誰も私を信じてくれないが、私を愛する人を失望させないと決めた。

●高肇良と受刑者が交わした手紙。常に50人以上と文通している。激励や勧告、證嚴法師の開示によって啓発している。更生を決意した人は善に向かい、彼もその一人だった。彼は刑務所を出ると実家へは帰らず、彰化に向かい、高肇良の支持と協力によって、徹底的に麻薬と悪友の誘惑から逃れた。



私は台南明德外監役（刑務所）に設置された麻薬患者更生収容所で高肇良さんと知り合って以来、三年にわたって文通を続けていました。今年の六月に三、四日の仮保釈があったので、急遽彰化へ高肇良さんに会いに行きました。屏東の実家を離れた時は、周りの人たちの目を気にはしていなかったが、また麻薬の道に後戻りするかもしれないと恐れていました。

これまで刑務所を出たり入ったりしました。釈放されて家に帰ってくる度に悪友が訪ねてきて、麻薬をくれたり、麻薬販売に誘いました。誘いを断れない度に、

「あと何回かやってお金が貯まったらやめよう」と思いましたが、結局やめられませんでした。

この環境と悪友から逃れようと桃園、中壢、新北市の中和、土城などで働きましたが、また見つかってしまいました。一、二度断つても再び元の木阿弥です。そして台湾を遠く離れたベトナムで事業を起こし、悪友からきっぱり離れようと思っただけでしたが、外国でもこの深い罠に飛び込むことになると思ひもありませんでした。この道に踏み込んだ後、事業をほったらかして、カンボジアから麻薬をベトナムに運び、またもや麻薬売

買の暴利を食うようになってしまいました。

その後、六人の運び屋が逮捕されたのにショックを受けて目が覚め、これ以上やってはいけないと思いました。中でも麻薬売買は無期懲役か死刑ですから、再び台湾へ帰りました。

私は十五歳の時に少年院に入ってから、銃刀法違反、傷害、麻薬などの罪で刑務所を出たり入ったりしました。この期間を数えてみたら十年以上になっていました。私一人が麻薬という犯罪を犯したことで、家族全員を苦しめていたのです。ですから高肇良さんの経験に頼って、

再生の道に踏み出し、自分を愛している人たちを失望させてはならないと思いました。

自分に再生の機会をあたえて

母と姉に付き添われて、彰化県の永靖郷へ行きました。高肇良さんが見つ付けてくれた借家に入って、彼の運転で仕事を探しに行きました。鉄工、はんだ付け、園芸農家の運搬係りなどを回って、最後に看板屋でやつと採用されました。

この間はどんなに忙しくて遅く寝ても、早朝七時半には必ず目が覚めるのは、

過去の四年間身についていた刑務所生活の習慣でした。自分の労力によって得た

お金は少なくとも喜びがあり、安心して使え、後ろめたさがありません。今の私は三十歳で、まだ若く、再生の機会が残っているはずだと思います。

以前儲けた大金を好き勝手に使っていた時は、かっこいいと思っていました。しかしそのお金で孝行しようと母に渡した時、「こんな汚い金をどうして使えるの？ これは多くの人を陥れたお金でしょう」と言われ、心が痛みました。普通の人と同じように儲けたお金で、家族が少しでも楽になると思ったのに。しかも

危ない橋を渡って儲けたお金なのにと、恨みに思いました。

これが当時の無知な私の考え方で、ただ金儲けをすればいいと思っていただけです。その背後でどれだけの家庭に危害を与えていたか、そして幸せを奪っていたかにも思いも及ばずにいたのです。今は更生した新たな人生の中で、麻薬常習者を感化しようと決心しました。一人を感化できれば一つの家庭が救われるのだから。

台湾の法律は、ただ処罰だけに重きをおいているため、刑務所はいつも満員です。なぜ犯罪率がこんなにも高く、更生

率が低いのでしょうか。その実、麻薬常習者は更生したいと切実に望んでいるのですが、心から手を差し伸べる人はいるでしょうか。

たとえ手を差し伸べる人があったとしても、その手を受け止められないとしたら、刑務所に入っていたことで自信をなくし、人目を気にしているからです。今回、刑務所を出て麻薬に興味がなくなっただけでなく、思い出したくもありませんでした。日中は出勤して仕事に励み、休日は高肇良さんやボランティアたちと学校や刑務所に行って麻薬撲滅を訴えています。

再度の試練

今年の九月、彼は彰化の員林で重大な自動車事故に遭いました。肋骨が六本骨折し、鎖骨は粉碎性骨折し、救急センターに送られ、痛みに耐えながら、高肇良さんと慈済ボランティアに連絡してくれるように頼みました。

母と姉が駆けつける前に、慈済ボランティアは家族のように付き添い、高肇良さんは更生人関心基金会に援助の申請をしてくれました。二週間入院した後、屏東の実家へ帰って療養しなければならないので、やむなく彰化の借家を引き払い、

また仮保釈中は、毎月屏東の地方裁判所へ行って保護責任者と面談しなければなりません。前回に帰った時、刑務所の同室で同じく仮保釈の人に出会いました。彼は私の耳元で、「まだ少しだがこっそりやっているよ」と言いました。

私は「同房のよしみで言うが、これからは絶対麻薬に触るな。この人生で刑務所を出たり入ったりしていたら、最後に後悔しても取り返しがつかないから。もしもきっぱり麻薬から離れるなら、いつでも彰化に來なさい。歓迎するから」と言いました。

やっと探した仕事も続けることができなくなりしました。社会に出たばかりでこの大きな試練に遭っても彼は不運だと思わず、体の傷が癒えたらまた社会に戻って頑張ると言いました。

彼の鎖骨には鋼がはめ込まれ、肋骨は大分よくなっていますが、日常生活は家族の手を借りなくてはなりません。落ちていて療養に専念し、健康になったらまた彰化へ行って仕事とボランティアをするのだと意気込み、高肇良とボランティアたちも一日も早くその日のくるのを待っています。

薬物は薬にあらず無用な物

◎文・李委煌／訳・黒川章子／撮影・黄筱哲

「麻薬にNOと言える私」というスローガンを掲げ、慈済は薬物乱用防止活動をこの七年間で七千回行ってきた。まるで予防接種のように、青少年に誘惑を断ち切る勇気を投与してきたのであった。

●慈済の薬物乱用防止指導員が映像、道具を使い、物語を交えて説明している。児童は集中して聞いている。



慈済の薬物乱用防止活動は今年で七年目を迎えた。法務部、教育部、衛生福祉部などの政府機関と協力し、台湾全土のボランティアと更生した人達は軍の基地や学校、地域社会、リハビリ施設へ赴いてキャンペーンを行ったり、ほかのさまざまな団体の宣伝活動に参加したりしてきた。その回数は優に七千回を越える。

九月の新学期スタートシーズンに合

わせ、慈済の教師連合会のボランティアが台北から雲林県まで南下しながら、各県合計四十五カ所の小学校でキャンペーンを実施する。子供達に薬物が与える危害について指導し、都市の近くであろうと離れていようと場所を選ばずその危険が及んでいることを知らせるのだ。

「純朴な人々にこそ、早いうちに『予防接種』的なキャンペーンを行う必要があります」と華南小学校学生部主務の呉承樺は強調する。地方の子供達は純粹であるが故に誘惑に乗りやすいそう。このような活動はまさに「薬



1. 友人から誘われ断りきれなかったから
2. 好奇心から
3. ストレス解消のため
4. 挫折を味わったため
5. 家庭が温かくないから

だ。まず自分がしっかりすること。自分を見失ってはならないことが大事だ。「麻薬にNOと言える私」と呼びかけている。誰でも薬物が及ぼす危害を知っているは



● 慈済ボランティアが学校内で薬物乱用防止キャンペーンを行っている。小学生に10分ごとにトイレに行く不便さを体験させ、これが「K他命」の及ぼす危害だと理解させ、みんなで薬物に立ち向かおうと励ましている。

薬物には手を出してはいけないことは誰でも知っているが、どのように拒否し、誤ちを乗り越えるかについては対策が取られていない。人々は中毒者の自業自得だとみなし、更生したいと思う中毒者を支援したり資金協力をすることに感心を持つ人は少ない。そこで慈済は教育の場を通じて支援を始めることにしたの

ずだ。一緒に健全な家庭を築き、社会に落ち着きを取り戻そう。

薬物一粒で一生紙おむつ

薬物危害防止条例に依れば、薬物は四段階に分けられる。注射器を使うヘロイン、モルヒネ、コカインは一級に属する。「アンフェタミン」「MDMA」は二級と呼ばれ、三級には「フルニトラゼパム」「ケタミン」などがある。四級は中枢神経を麻痺させるものである。警察行政署の最新統計資料では、ここ十年間で青少年の三級薬物被害者が十五倍にも増えている



●最近の薬物。飴やコーヒースティックを装って偽装包装されている。警察の摘発を逃れ、包装を変えて子供に近づき誘惑するのだ。ボランティアと児童たちは、劇を通じて見知らぬ人から飴をどろどろと渡された時にどうしたらいいかを学習している。



●アルミホイルを丸め、元に戻すことがどれほど難しいか体験する子供たち。ボランティアは一度中毒者になると人生がすべて狂ってしまうことを伝えようとしている。

ことが明らかになった。
児童福祉連盟が今年十月に発表した調査結果では、約十六％の子供が三級、四級の薬物をどのように手に入れたらいいか知っている。さらに四分の一以上の子供が、もし使うとしても量を自分で考えて使えると答えたのだった。一方、それらの薬物に手を出した理由には、「挫折を感じたから」「家庭が温かくないから」「ストレス解消のため」「好奇心」などがあった。これらの結果には、薬物を求めるときには生理的要素よりも心理的要素の方が大きく関係していることが表れている。

中学生くらいの時期は、好奇心が旺盛で周囲からどう見られているかが気になるもので、また、衝動的に行動したり、誰かの真似をしたがることが多い。正しい価値観を持つ大人の導きがないと、後先を考えずに薬物の誘惑に手を染めることにもなりかねない。

最近世間を騒がせている「ケタミン」を例にとると、この薬物は長期的に摂取すると脳が萎縮し、記憶力と思考力が減退し、急性精神障害、ひいては血管障害を引き起こして急死する場合もある。その障害は永久に治らないそう。同時に、膀胱壁が薄くなり、膀胱の容量が五十C

Cにまで減少して頻尿状態を引き起こすこともあり、膀胱切除が必要になる場合もある。正に「薬物一粒で一生紙おむつ」なのである。

法務部の統計では、未成年者が初めて中毒になる年齢で最も多いのは十二歳半であった。これは驚くべき結果だ。台湾薬物乱用調査の報告書によると、手に入れた薬物の半分以上は同級生や友人から渡されたという。

桃園市の慈済ボランティア・許玉姫は、長期的に龍潭女子刑務所の受刑者と桃園少年院で保護観察下にある子供達を訪問してきた。その中でこのように次の世代

の受刑者の八、九割が薬物に関係する罪を背負っていることを知ったのだ。

親も薬物中毒者の場合、子供を薬物の受け取りに行かせることが多い。普通の家庭であっても、仕事が忙しい両親が子供に申し訳ないという気持ちから法外な金額のお小遣いを与えたりすると、子供は悪い友達に目をつけられて暴力団などに利用され、罪を背負わされることもある。両親が気づいた時はすでに後の祭りなのだ。

姿を変える薬物 警戒を怠らないように

教壇の上に、慈済教連会のボランティアが二枚のアルミホイルを敷き、児童二人を呼んで、「ホイルを丸めてから元通りに広げてください」と言った。平たいホイルを一度丸めたら、どのようにしても元の光沢のある平面に戻すことはできない。ボランティアは子供達に呼びかけたのだ。中毒になった体はこのアルミホイルと同じなのだ。一粒ぐらい試してもいいだろうという軽い気持ちでも、絶対に試してはいけない。中毒になるのは簡単だが、やめることは容易ではないのだ。その上後遺症に一生苦しめられるのだ。

ある子供を持つ親からボランティアに報告が寄せられた。「すごくいい気持ちになれる」「魂だけ宙に浮いているみたい」という麻薬常習者の言葉にとっても興味をもったことがあると話していた息子が、今回慈済ボランティアのキャンペーンに参加して薬物の恐ろしさはつきりと分かったと言ってくれたそうだ。「やるべきことをやる。それが智慧であり、できないのは愚かさゆえである」。この静思語の言葉を息子は何度も繰り返していたそうである。

そしてこの保護者はボランティアに「おかげで私たち家族は救われました。

ありがとうございました。」と結んだのだった。このような思い出が慈済ボランティアを励まし、活動を続ける力になっていく。

国連が発表した昨年の統計では、地球の全人口のうち二億人以上が薬物を使用しており、毎年平均少なくとも八億人が薬物により亡くなっているそうだ。国際貿易においても、貿易額の最も大きな三大商品は、石油、武器、そして薬物であるというのは真にやるせない現実である。製造はもとより、運送、販売するのも使用するのも全て人間が引き起こし、公共衛生にとって大きな問題を生み出し

ているのだから。

最近新しい薬物が続々と出ている。外見の包装を見ただけでは、チョコレートか飴か、あるいはティーバッグかコーヒースティック、それとも煙草だろうかと見間違ってしまうほど巧みなのだ。薬物乱用防止の教育は学校だけにとどまらず、家庭でも警戒心を持って話題にする必要があるだろう。そこで慈済教連会のボランティアは、キャンペーン以外に教材の出版にも着手したのだ。これからも指導員を要請するなど、活動の場所を広げ、力を注いでいく所存である。



- 要らないから要らない、とはっきり言葉や態度で表すこと。
- 自分のことは自分で決めるという道徳観を持っているからと言う。
- きまり悪そうに、体の調子が悪いから両親にとめられている、と言う。
- 自分は気が小さいからそんなことはできないタイプだと言う
- 話題を変えて、相手の興味のありそうなほかの話をする。
- 逃げるが勝ち、悪いけど用事があるから先に帰ると言う。

【人文風景】

林君英

僻地に愛を届ける動く城

◎文・葉奕緯／訳・黒川由希／撮影・顔松柏

色鮮やかな車が僻地に愛を届ける
一家四人が力を合わせ
おもちゃで喜びを届け続ける
子供のほか、高齢者や社会的弱者にも



遊

びは子供の権利です。夢は遊びから始まります」

陽光が窓の一隅に降り注ぐ。はしやぎ声が教室中に広がる。いや、教室というよりむしろ「遊びの楽園」という言葉のほうが、この場の状況にふさわしいだろう。窓からのぞき込むと、子供たちの視線が右側の大きなビニール製の滑り台に集まっている。はしやぎ声の多くはここから聞こえてくる。左側ではおとなしめの子供たちがブロックを囲んでおり、それぞれ両親が付き添っている。中央には「夢想遊園地」の文字入りのシャツを着た男性。保護者に中古玩具の寄付を募り

つつ、一方で子供たちにモノポリーで遊ばないかと呼びかけている。この「夢想遊園地」の創設者、林君英さんだ。

移動玩具車で僻地集落へ

十年前、彼は台湾で初めてバンを運転して僻地の集落を訪れ、各国の玩具や手製の玩具を子供たちに贈った。しかし、最初は、漢人文化を象徴し、伝統と衝突する現代的な玩具を携えて先住民の村に入ったことが、当然ながら意見の相違を引き起こした。

林さんがおもちゃを持って僻地を訪れ

るたび、村の長老たちは、子供たちが目

新しさに惹かれ、手づくりのおもちゃに
対して興味を失うのを危惧した。しかし、
林さんが長老たちを移動玩具車の前に連れて行き、各国の独創的なおもちゃを紹介すると、長老たちの考えは変わった。

「実際、子供なら誰でも自分だけのおもちゃを作るものです。たとえば、消しゴムでサイコロを作ったりね。遊びは人の天性です。制限され、押さえつけられているだけなんです。僕は村の長老たちに各国のおもちゃの仕組みを紹介しました。それで彼らも僕の持ってきたおもちゃが、子供の創造力を喚起するというこ

とが分かったんです」

林さんは誇らしげに言った。

移動玩具車は、金門、馬祖などの離島を除けば、台湾中の僻地にその足跡を残している。その後、彼は「愛のバックパック」活動にも協力し、ボランティアグループを組織して、僻地や先住民の集落、国外などの子供たちに中古の玩具を届けた。

「我々は、一年前に香港の映画俳優の舒淇さんから夢想遊園地に寄贈された移動玩具車に乗り込みました。車体に描かれた、鮮やかな緑色と青色のほほえむ地球は、絵本作家の幾米^{ジミ}さんがデザインし

林君英

僻地に愛を届ける動く城





たものです」。今では夢想遊園地を代表するロゴとなっている。車中、林さんは始終笑顔で、「僕たちはゲリラなんだ」と言う。というのは、現在の夢想遊園地の事務所は台北青年公園の隣にある軍営の跡地で、地区の里長が彼に貸したものだ、台北市はそこを公営住宅にするつもりで、そのうち立ち退きを求められる可能性が高いのだ。

車を事務所の脇に着け、荷物を下ろす。左側の一号倉庫は他の団体と共有する十坪のスペースで、中は僻地に持つて行くおもちゃでいっぱいだ。三万元（一元は約三・五円）もするトランポリンが十台、

子供が踏むフロアマットなどがある。はす向かいの二号倉庫の建具はすべて木と釘で作られている。これはお父さんの林文忠さんの手づくりで、文忠さんはその場で私たちに手編みのセパタクロー（籐球）の作り方を教えてくれた。時間があ

古いおもちゃに新しい生命を

る時は、さまざまな場に向いて教えている。高齢の文忠さんも実際の行動で子供たちの理想を支えている。

中古玩具に新舞台

●（上図）林さんは台北市内の東区地下街に青と緑のマットを敷いて、親子の遊び場を作った。
●（下図）青年公園横の軍営跡地が林さんの事務所だ。屋外には恐竜のボックスを置いて中古玩具を寄贈してもらっている。27項目に分類したおもちゃを透明なベンケースに詰め、バーコードを付けて、僻地の学校に行った時、子供たちに貸し出ししている。



を案内してくれた。壁には世界各国の国旗や景勝地の写真があつて、子供たちが写真を撮れる。傍らにはそれぞれの国の伝統衣装が飾られている。壁際のガラスケースには、林さんが各国から収集したおもちゃが置かれている。マレーシアのマンカラ（ゲーム）、香港の虎頭帽、日本のでんでん太鼓、韓国のもんこなどだ。そのそばの床には人の字型のボールプール。池からボールが溢れないような設計になっている。

プレイホールに入ると、床にはパズルマット。青と緑が入れ違いに敷き詰められている。プラスチックの滑り台、ま

い玩具が所狭しと並べられている。おもちゃは当初十六項目に分類されていたのが、現在では二十七項目になっている。おもちゃのクリーニングのやり方も決まっっていて、水に浸して刷毛で洗ったら自然乾燥し、乾いたら分類してしまう。

このほか、「おもちゃの医者さん」(Dr. Toy) 団体と連携している。「おもちゃの医者さん」は毎週火曜日、木曜日に親子館でおもちゃを修理してくれるほか、その他の時間は新泰小学校に行つて、物を大切にする気持ちを育てている。たとえば自家製の天然蜜蝋ワックスを木の器具に塗るのは、衛生と保護の効果があ

ごと遊びに使う小部屋などもある。緑色のラベルは中古の玩具であることを示している。壁のそばには、林さんが特別に抜型工場でデザインした「紙れんが」があり、子供が上に立ったり、想像上の建物を作ったりすることができる。彼が大好きなおもちゃの一つだ。傍らの棚にはクリーニング済の透明のペンケースが詰まっている。これはナンバリングしてバーコードを付けて使う。移動玩具車が僻地の学校で活動を行った際に、家でも遊べるようにおもちゃを貸し出しているのだ。

保管室に入ると、まだ分類されてい

る。古い洋服ダンスの中にベニヤ板を何枚が増やし、標本瓶を置けば、ディスプレイ棚に変身だ。以前は機械修理をしていた李昇両さんは、ここでおもちゃの医者さんをしている。「お客さんの多くは、おもちゃそのものの価値を求めて来るわけではなく、大切な思い出を残したいといつて古いおもちゃを直しに来るんです」と話す。

林さんも笑つて言う。「私はシステム派でおもちゃの医者は実務派なんです。私はよく元の部品を探してきて組み立てるわけですが、おもちゃの医者は他にはない代替品を作るので、最後は使うのが



●学校だけでなく僻地や被災地にもはるばる足を運ぶ。対象はお年寄りにも広がっている

もったいなくなってしまうんです」

心のこもった玩具で

病気の子供やお年寄りに寄り添う

移動玩具車が赴く先は学校だけではなく。末期癌の子供が入院する病院もある。林さんは、いろいろな色のプラスチックの椅子を並べ、床に電車のレールを置いて、病室をおもちゃの部屋に様変わりさせてしまう。全身に点滴の管を付け、顔



全体をマスクで覆ってはいても、遊びたいと思う生まれつき備わっている心は変わることはない。小さな瞳がきらきら輝く。

林さんはまた骨肉腫の患者のために「骨細胞」人形もデザインした。分かりやすい説明と癌細胞をかたどった人形で、自分たちが入院している原因や自分の身体の状態を理解できるようになっている。現在「手脚の切断人形」を開発中で、義手や義足を使用している子供に贈る予定だ。こうした人形の教育的意義は大きい。

さらに、手づくりの布の裁断機で「視

覚障害児のためのケーキ」を作ろうと考えている。視覚障害の子供はケーキの匂いをかいだり、味わうことはできるが、ケーキに触ってもとろけてしまうだけだ。林さんは触感のあるケーキを作ろうとアイディアを巡らせている。夢想遊園地のボランテニアたちもそれぞれ特技を持っている。曾鏤鏤^{ズオスオ}さんは、ベビーシッターの試験の際に林さんと知り合い、協会の理事となった。時間があると壊れたおもちゃを縫い直したり、外での展示の際に使うディスプレイ器具などを準備したりしている。邱育漆さんは以前は北投親子館の館長をしており、両親と子供を

林君英

僻地に愛を届ける動く城





●骨肉腫患者のために作った骨細胞人形。

を入れている。たとえば、お年寄りを対象としたシルバードゲーム大会を開催し、四色牌、ラミー、マージャンなどを楽しんでもらった。知育ゲームのクイズや説明書は拡大し、ラミーのルールは簡略化して、お年寄りにも遊びやすくした。今



●林さんの父親はタイのセパタクローを改良して、作りやすい編み方を考えた。

連れて僻地への活動を行っている。彼女は手脚の動作をコントロールできない脳性麻痺の子供に会ったことがある。トラップリンを見て興奮して意志の力でトラップリンによじ登って遊んでいたことに、心を打たれた。一緒に来た子供もボランテニアという意識はなく、ただ友達と一緒に遊んでいるという感覚だ。

ここ数年、林さんは子供のための新しいおもちゃを研究開発したり、視察したりする以外に、大人用玩具の改善にも力

後は香港のお年寄りを台湾に招いて、一緒に国際シルバードゲーム大会に参加してもらいたいと考えている。

林さんがお年寄りのためのゲームを作るのにはわけがある。「台湾では多くの人が年をとるとマージャンをするかテレビを見るかしきありません。記憶が衰えてくると、マージャンの打ち方も忘れてしまつて、毎日テレビを見ているだけになります。だから、お年寄りにも面白いゲームをたくさん覚えてもらふことで、記憶力が衰えてもできる遊びがあるようにしたいんです。それによって家族との感情的なつながりも保ってもらいたいと



林君英
僻地に愛を届ける動く城

思っています」

二〇〇九年八月に台湾南部水害が発生した時も林さんの姿があった。当時、南部の被災者の置かれている状況が気になった彼は、すぐに現場に駆けつけた。途中で、高速道路が渋滞し、高雄の愛河が氾濫するなどの困難に見舞われたが、彼はあきらめずに避難所にたどり着き、幼児ケアスペースを設置した。子供玩具車を運転して、里加、新美、甲仙、那瑪夏、獅子郷、林辺などの被災地を巡り、大人たちが緊急救助に手一杯の間、彼はいつもと同じように、避難所の中の子供の面倒を見た。

一家四人が被災地に行く

二〇一一年、日本の宮城県沖の太平洋でマグニチュード九・〇の大地震が起き、巨大津波が発生した。その後、林さんは一人で被災地へ行き、自治体職員と連絡を取り、台湾南部水害における「被災児のケア」の経験を仙台市でも行いたいと申し出たが、初めは日本の自治体職員は反対した。当時、各国のNGOはよい支援の方法が見つからなかった。しかし、林君英は自治体職員に英語で企画書を説明し、日本側もこの前代未聞の方法を試

してみることにした。

双方が共通認識に達した後、林さんは台湾に戻り、仙台市へのボランティアを募った。しかし、当時、原発の放射能漏れにより発がんリスクが極めて高いという噂が広まっており、参加の意志を持ったボランティアたちも家族の反対であきらめ、最後は林さん一家四人だけになってしまった。

二人の息子は林さんの影響で僻地や病院で奉仕することを誇りに思うようになつていた。アンディ（長男の林邦沢）とジャッキー（次男の林邦鼎）は、小さい頃から父親と僻地や病院で活動を行って

いた。東日本大震災の時、彼らはクラスメートに被災地への励ましのメッセージを募った。ぎこちない日本語で書かれた百枚のカードは、彼らの手で仙台に届けられ、被災地の子供たちを励ました。「言葉は通じなくても、おもちゃで遊べばすぐに仲良くなれたし、日本人と台湾人の違いは何も感じませんでした。遊びが大好きってことは同じですから」と、ジャッキーが補足した。

仙台市在住の「台湾婦女会」の通訳ボランティアの助けを借りて、林さんは子供たちとビーズ遊びをした。さまざまな色のビーズをピンセットでつまんで型枠

林君英

僻地に愛を届ける動く城



●おもちゃのお医者さん、李昇岡さんはおもちゃを修理し、物を大切に作る気持ちを育てている。

に入れ、自分の好きなデザインに並べる。断熱紙を敷いてアイロンで伸ばしたらビーズ画のできあがりだ。それから、「感情発散」式の遊びもある。バラエティ番組でよく見られる大きなビニールの球に空気を入れ、その中に人が入る。それを他の人が押して回してストレスを発散するのだ。滞在期間中、仙台市には各国の機関が視察に訪れていたため、ホテルはどこもいっぱいだった。林さん一家は簡素な旅館に泊まるしかなく、一枚の布団



に身を寄せ合って夜を過ごした。そして、日本側がプロセス全体に習熟した後、帰国した。

林さんはあるフォーラムで一人のカンボジア人と知り合った。この人はカンボジアの地元図書館を開いて子供たちが読書できる場を作っていた。そして、村の医療に対する考えが変化に対応できておらず、精神障害者に対して恐怖や無理解から、彼らを部屋に閉じ込めるなど、手荒な扱いをしているということに気づいた。そのことで、彼らが行動できる空間が足りないだけでなく、彼らが一生の中でより多くの活動を行う可能性を奪っ

ているという。このことを聞いて、林さんは遊びを通じて、寂しさを癒やしてもらおうと自費の千円で現地におもちゃを届けることを決めた。

「祖父は思いやり深い人で、我が家には生活に困って身を寄せる人がいました。毎日テーブルを二つ、この人たちのために用意していました」と林さんは言った。彼は幼いころから知らず知らず奉仕の精神を心に刻み込んだのである。

二十四歳の時、熱傷病棟のデータベアシステムの管理を手伝った。二十八歳の時、エデン基金会でCEOの秘書を務め、組織内部の作業を担当した。これら

林君英
僻地に愛を届ける動く城



の過去の経験が玩具の片付けの仕事にも生かされている。第一線での活動にこだわる彼は、輔仁大学の教員になる可能性を捨てて非常勤講師になり、中古玩具の募集と、子供たちのためにさまざまな特殊なおもちゃを設計することに全力を傾けている。

妻の邱秀玲さんは彼の事業を支え続けている。彼女は主に事務系の業務を担当している。数年前に超音波検査中に腫瘍が見つかったが、幸い良形で、切除後は回復に向かっている。林さんは三十二歳の時に、突如、臨床上致死率が九割という急性心筋梗塞の発作を起こしたが、幸

いにも当時病院での検査中だったため、すぐに緊急治療室に移されて一命を取り留めた。しかし、三十七歳の時、C型肝炎にかかっていることが分かった。「私たち夫婦は、悪い心の持ち主なんです」とユーモアたっぷりに話すが、その言葉には苦勞がにじんでいる。

このほか、林さんは子供の時からリュウマチを患い、天候が変わると手や足が痛む。食事の時に、彼が痛み止めを飲むのを見たことがある。昨年、海外で大病を患い、帰国後も仕事を続けたため、一時的に聴力を失った。二カ月の治療を経てようやく徐々に聴覚が戻ってきたが、



●この10年、林さんは移動玩具車で台湾中の僻地を巡り、日本や香港まで足を運んできた。中国で部品の流通ルートを探し、カンボジアで実践した。夢想遊園地を作った初志を胸に、おもちゃによって子供の中に元々備わっている創造力を引き出している。



林君英
僻地に愛を届ける動く城

今でも若干音の聞こえが悪い。

学校での活動中、リュウマチで足が痛いたため端っこの方に座っていたら、花蓮の僻地の子供たちの会話が聞こえてきた。「トランポリンで遊んだことある？」「ない。これが初めて。前に夜市にトランポリンがあつたけど、一回百円だったの。お金ないからできなかった」。この話を聞いて、林さんは自分のしていることは意義があると思った。彼は立ち上がった。病気があつてもこの事業は続けなければならぬと思った。

大切にすることを学び、二酸化炭素の削減にも寄与している。

活動当日、ジャッキーが親切に紙れんがの遊び方を紹介してくれた。教室をさつと見渡した後、彼は満足そうにほほえんだ。「見てください。これが私たちの活動の目的なんです。今まで百回もの活動に参加してきましたが、会場が笑声でいっぱいになるたび、やっぱり感動します。父は新しいおもちゃを買うお金はなかったけれど、創意工夫があれば簡単材料でもびつくりするような新しい遊び方ができるんです」。一家全員が人の笑顔に満足を見いだしているのである。

遊びから夢と愛を

移動玩具車は子供と一緒に遊ぶだけで、たいしたことではないと思う人もいるかもしれない。そう思うのは、方法が違えど「遊び」も一つの学びだということとを忘れているからだ。林さんにとって、おもちゃが学びの教材なのだ。子供ボランティアを訓練し、ゲームで遊ぶことで、仲間同士のコミュニケーションを促し、世界各地の創意工夫に溢れたおもちゃで、想像力を刺激し、視野を広げているのである。それだけではなく、リサイクル玩具を使うことで子供たちが資源を

成功の定義はさまざまだ。財富、権力、名声もそうだろう。しかし、ある人たちにとって、幸せの定義はいたってシンプルだ。自分の周りにいる人のうち何人が目を輝かせているかだ。林さんは、世間の目で自分を評価しない。どれだけ無私の人が彼の後ろに立っているか、助けが必要な時、手をさしのべてくれるかで、自ずから明らかなのだ。

(経典雑誌219期より)

林君英
僻地に愛を届ける動く城





【證嚴法師のお諭し】

◎ 訳・慈願 絵・林淑女

福を修め、
日々米蔵に米を蓄える
ようなもの
知恵を働かせば、
小さな種も天地を内包
している

小さな種も大樹に成長する
どんな小さな力にも
無限の可能性がある

再び年末祝福会と慈濟委員と慈誠隊
員の認証式の時が巡ってまいりました。
それはまた古い一年が過ぎて、新しい
年が来臨したことを告げています。一
秒一秒がつもって一年となり、毎日
時と駆け足をしているように、いつの
間にか五十年を過ぎが来年は五十一年
目に邁進します。

家庭の主婦たちが日々五毛銭を貯蓄
していた「竹筒歲月」が慈濟の慈善志
業の始まりでした。早期の「慈濟月刊」
をめくると、献金した人の名前と五元、
十元の金額がぎつしりと記載されてい
ます。このわずかな淨財は少しも漏れ
なく貧苦と救難にいる人たちのために
使っていました。

功德会創立当時は住む所も精舎もな
く、普明寺の裏に仮住まいをして、わ
ずかな畑を借りて農業をするかたわら、
針仕事の収入で自力更生の生活をして
いましたが、どんなに苦しくても堅い
志を持って貧民救済の奉仕を担ってい

ました。毎月の配付日にはケア家庭の人たちが救済米を受け取りに来て、お昼には皆がおじやを食べて満腹して帰ることを願っていました。そんな中で常住尼僧の生活は苦しく常に米櫃の中が空でどうしようもなくなった時は、普明寺からお米と食用油を借りてしのんでいました。

屋外にある鉄の桶を拾ってきて炉にし、借りてきた米を洗って水を入れ、その下に開けてある穴に薪をくべておじやを作ります。人数が多い時は水を足します。鍋の中に映る青い空と白い雲、それに木々の緑を見た時、私はそ

の米粒のなんと貴いことかと、思わず心の中で感動していました。

それは「仏教克難慈済功德会」時代の私が、他人の軒下に身を寄せながらも借金をして苦難の人たちを救済していた苦難の時代でした。

今まで歩いてきた艱難な慈済の救済奉仕の道は、次第に人々に認められるようになり、花蓮から台湾各地に志を同じくする会員が増えました。一粒の米は一俵に、一滴の水は川のように大きくなり、慈善、医療、教育、人文の四大志業が発祥地の台湾から世界の国々へと向かって広がっています。

瞬く間に過ぎた五十年は数々の困難

にも会いましたが、終始堅い道心を忘れずに一步一步進んでまいりました。当時の苦労を振り返ると、感謝の気持ちで満たされます。困難に遭った時には、多くの発心した人たちが私たちの前に立って導き、後ろ盾になって愛の道を敷いてくれました。世界百九十七カ国にある慈済の愛の足跡は九十ケース以上上がりほとんど地球を半周しています。

昨年の歳末祝賀会で、私は「大愛を世界に広げて、情の道を古から今に至るまで」と皆を励ましました。今年は

大愛をさらに遠くまで広げるだけでなく、一日一日米蔵に米粒を蓄えるように福を修め、知恵を持つ中に小さくとも天地のあるよう願っています。

慈済は福を修める道場です。自分一人の力など小さな力だと侮らないでください、その小さな力も集まれば無限の可能性を発揮できるのです。慈済初期の克難精神を持ち続けて行かねばなりません。たとえ自分が食べるために炊く米がなくても、皆で一滴一滴に愛を寄せ集めて、苦難の淵にいる人のお手伝いをしましょう。

慈済は「持慧」の道場です。大樹も

始めは一粒の種から成長します。心して天地間の微妙な法理を体得し、広い心を以て人々の中で知恵を練り、衆生を利益するという真理の大道を歩くことです。

慈済人が人々に奉仕することを立願しているのは、内に「誠正真実」をこめ、外では慈悲喜捨を願う苦難の人に抜苦与樂と同時に法水で煩惱を洗い流すことです。奉仕は造福でありまた慧を修めることです。信心を堅くもって菩薩道においても福慧双修を続けなくてはなりません。

立願発心を永久に
菩薩の志願は堅く
苦難の衆生に造福をしよう

慈済の大家庭には毎年、委員（ボランティア幹部）と慈誠隊員（男性ボランティア）が誕生しています。今年は二十九カ国から二千人以上の海外慈済人が台湾へ帰ってきて慈済委員と慈誠隊員の認証を受けました。

古参ボランティアは長年にわたって細心に新人を導き、絶えず愛の糧を与えていました。彼らも辛抱強く一心に見習い訓練を受けて実り、はるばる台

湾へ認証を受けに来て、菩薩道を歩むことを決意しています。

五十年来、慈済が力を尽くして世界に愛と善の種を蒔いているのは、一人でも仲間が増えることによって、さらに苦難の衆生に造福することができからです。今では、一粒一粒の種が芽を出し成熟して大木に成長しました。大木の花が咲いた後に実り、種がまた蒔かれます。これが「一生無量」なのです。

認証を受けた慈済委員の胸には「仏の心師の志」と書いたリボンがつけられています。仏の心とは大慈悲心で、

わが師、印順導師の志「仏教のため、衆生のため」とは仏法を善用して天下の人々に利益することです。皆は異なる国々からきて言語、文化背景は違いますが、同心、同師、同志の心の言語は相通じます。ですから心を一つに、和やかに愛をもて協力し合わなければなりません。

オーストラリアから来たマン・アイレンは台湾語を聞いて分かりませんが、それでも毎朝皆と「説法」を聞きます。そして、その後や読書会で、ボランティアたちが法を解説して聞かせてあげ、法を吸収していました。これは単に法

を耳で聴いていたのではなく、長年つぶさに目で見て心に慈済の行動を焼きつけて来たからでした。

ベトナムの市場で小さな商いをしていた范氏貴は、自動車事故に遭った後慈済の救済を受けました。その後、自分よりも貧しい人を助けようと立願して慈済委員になり、百人以上の会員を集めました。

ミャンマーのウ・ティン・トンは二〇〇八年のサイクロン・ナルギス災害後に慈済との縁がありました。慈済が現地で支援活動をしていた時、貧しい農家が毎年種もみを借りて収穫した後

に返済を繰り返していたので、なかなか貧困から抜けられないことを知りました。そこで慈済は種もみを支援することを計画しました。ウ・ティン・トンはその支援活動と静思語の影響を受けて、生命の尊重を実行に移して、農薬や殺虫剤を使わず稲を育てたら豊作になり、種もみを借りる必要がなくなりました。

彼は「竹筒精神」にならって、一日五銭の代わりに一日に一握りの米を蓄え、隣近所にも米貯金を勧めて同郷の貧しい人たちを助けました。この度、彼は認証を受けるために台湾へ来た時

に言いました。「もしも慈済が私に一千元援助していたらたちまち使い果たしたでしょう。しかし慈済は慈悲をくれました。それは生涯使いきれない資産でした」と話しました。

新しく誕生した彼ら菩薩たちの発心立願の過程はどれも感動的でした。人生で困難に遭うことは免れられませんが、幸いにして恩人に巡り合うと心境は一変して、逆境を変えることが出来ます。彼らのストーリーは、誠の心を持ち続けていれば、愛の力は循環することを実証しています。

困難にも退かず
さらに前進する
善に解釈してすべてを包容し
逆境の試練に感謝する

仏陀が菩提樹の下で悟られた刹那「不思議だ不思議なことだ、大地の衆生は悉く如来の知恵と徳相を具えている、ただし妄想にとらわれているために明らかにすることができないのだ」と言われました。仏陀が示されたこととは、衆生にはみな仏性が具わっているが、一念の差によって無明が起きると是非の分別がわきまえられず、欲念が尽き

ずに愛、恨み、情、仇に纏わりつかれる、ということなのです。

ですから悪業は雪ダルマのように膨れ上がって、世間は濁気に満ちてしまっているのです。

どうすれば危機を生氣に変えて、汚濁を清らかにすることができるのでしょうか？ 仏法は世を救う妙薬です。無量義經に曰う「微滯先墮、以掩欲塵」とは、法水は欲望の塵土を平息させることができる、仏法に深く入るには「法」によって、煩惱を治さなければならぬということです。

念仏は口先だけでなく、「仏の心を己

の心とする」ことが必要で、心は常に仏陀の大慈悲心を堅持し、法を聞いて理解するだけでなく、日常生活に応用して自分を変えることです。

菩薩道を歩くには、人々の中に入らねばなりません。人が多いと雑音が多く堪忍が必要です。もしも耳障りな声や嫌な顔色の人に出会ってそれに氣を取られていると、道心が退きます。

厳しい逆風がなければ、修行してきた道の力がどれくらいのものなのかを量ることができません。仏陀は修行した過程でもさまざまな障害にあわれましたが、恨まずに感謝の気持ちで克服

され、優しく前向きに忍耐の心を持つ

ておられました。難行と思っても退かず、前進すれば菩薩道が成就するので

す。

菩薩を志す慈済人は、必ず困難であっても赴き、困難をも可能にします。

人々の中においても周りの煩惱に同化せず、「事」を以て「理」に、慈済の薬膳「四神湯」（足るを知る、感謝、何事も善に解釈する、受け入れる）を使って煩惱をなくします。付き合う時は心を合わせて仲良くし、互いにいとおしめ合い、協力し合うという「四物湯」を用いています。そして、さまざまな試みを受

けても常に耐えます。

宇宙の大覚者仏陀は、私たちに「無常観」を持つこと、そしてなおも「生命の価値観」を打ち立てるべきと教導いています。皆が刹那を把握して家庭のために尽くす以外に、社会のため、また自分の人生のため、正しい道を進むことは重要です。

菩薩道を行う時は「聞、思、修」だけでなく「信、願、行」が必要です。もしも発心立願に行いが伴わなかったらそれは空発願です。「願」と「行い」は並行しています。

衆生のために休まずに、法を聴いて、

法を伝えることが精進です。菩提の道を永久に少しも偏らずに歩むことは勇猛であり、勇猛精進であれば菩薩道から成仏に向かうことができます。

慈悲と愛は人心の滋養

世に慈悲と関心を寄せ

大愛に努め奉仕をしよう

フランシスコ・ローマ教皇は、二〇一六年を「いつくしみの特別聖年」としました。十一月三日、教皇はバチカンで各宗教団体代表と対談され、慈済も招待を受けました。教皇は、地球の

天災人禍が絶えず、生態破壊の際に「慈悲と愛」の精神を以て人心を滋養することが、最も必要であるとおっしゃいました。

すべての宗教は「慈悲と愛」から離れることはできず、宗教の実質とは無私の愛で衆生に尽くすことです。ですから正しい信仰はお互いに衝突しません。異なる宗教間で、手を携えて苦難の世に愛の力量を発揮することです。

愛のエネルギーは一人一人の心から発揮されます。平安な国で生活できる幸せに福を知り感謝しなければなりません。広い心で世の中の苦難の淵にい

る人々に関心を寄せましょう。

極端な気候変化に、天地の災難が多発している現在、人心の浄化を強化しなければなりません。人々が慈悲の心を培い、貪婪と欲念を抑えると、天下の災難から離脱することができます。皆さんの精進を願っています。



痛風の患者は

大豆製品を食べられますか？

◎口述・黄靖琇／文・黄小娟
訳・慈昶／撮影・邱如蓮

大豆製品はベジタリアンにとって、重要な蛋白源ですが、痛風患者は大豆製品を控えるべきでしょうか？

●尿酸値が高い痛風患者はベジタリアンになってもいいのでしょうか？

現代人の文明の病気とされる痛風は、遺伝子やほかの病気との合併症で起こったものです。プリン体を多く含む食物をたくさん食べたからという理由だけではなく、体の「新陳代謝」がよくないために尿酸値が増加し、痛風の症状になったのです。痛風



になるのは通常次の三つの原因によりります。

- ①体によくない食物
- ②間違った調理法
- ③食べ過ぎ

痛風患者はトランス脂肪酸が多く含まれている動物性油や動物の内臓、バター、コーヒークリームなどや、多量の肉や海鮮類（とくに甲殻類）、糖分の高いフルーツやクリームコーンなどの食品、多量のお酒を控える必要があります。

そのほかに、できれば揚げ物や焼き物など高温の調理法を避けること。また、飲酒時に熱いスープや揚げたピーナッツな

どの食物と一緒に取りすぎると、尿酸値が上がって痛風になります。

痛風になる食べ物としては鶏肉や海老や蟹などの海鮮類が上げられ、ベジタリアンが取らない物がほとんどです。その上、ベジタリアンはたくさんの野菜を取る一方で、植物中に含まれるフィトケミカルと抗酸化の栄養素が痛風を予防し、改善させます。

アメリカ、日本、シンガポールが共同で行った大規模な研究結果によると、植物性のプリン体は痛風を悪化させないことが分かりました。尿酸値の高い人や痛風患者は正しい調理法で料理し、適切に

大豆製品を楽しみましょう。

痛風患者はベジタリアンになれるかどうか？ その答えはYESです。痛風患者はもっとバランスがとれた健康的なベジタリアンに学ぶべきです。

ベジタリアンは揚げ物を好みます。揚げた大豆製品や大豆加工品を食べると痛風になりやすくなります。油脂は、揚げると酸化して過酸化物質を発生し、炎症を起こす物質が体内に蓄積します。また、体によくない調理法と食べ物の選り好みも痛風になります。だから、痛風になるのは野菜だけを食べるためではないのです。プリン体の高い椎茸を例に上げると、

椎茸を毎日大きなお椀に一杯分も食べれば問題になりますが、バランスよく摂取すれば尿酸値の濃度は上がりません。

もう一つ、水は尿酸値の代謝をよく助けます。多く水を飲めば尿酸が尿液と共に体外に排出されます。もし水をあまり飲まないと、尿酸が体に絶えず残り、しまいには関節に蓄積して関節が痛くなります。

だから、飲食のバランスが鍵なのです。バランスよく食べ、たくさん水を飲み、現代文明病にならないようにしましょう。

Qどのような大豆製品を選んだらよいですか？

大豆製品は遺伝子組み換えではない大豆を選びます。もし見た目で判別できなければ、包装の表示から判断することができます。現在、台湾の食品表示に関する規定では、遺伝子組み換えかどうかを記載しなければなりません。購入する前に注意してよく見てください。

大豆製品は高蛋白質で、製造過程で抗菌剤や防腐剤などを入れます。適度に保温しないと腐りやすいからです。製造から販売までの製品管理に加え、冷蔵や冷

凍など低温で保存することが重要です。正しく保存すれば、安心して食べられます。

なるべく天然の豆類を選び、大豆や黒豆や枝豆などをジュースにしたり料理に加えたりします。大豆を蒸してミキサーにかければ豆乳になりますし、大豆ご飯にもできます。黒豆は煮込んだりジュースにします。ナッツ類のパウダーを加えればナッツミルクの完成です。枝豆は卵と入り炒めにしたたり、ピーナッツと一緒に煮込んだり、また、枝豆と賽の目に切った高野豆腐の煮込みなども歯ごたえがよく、満腹になりやすいです。

慈善の家政婦

料理、掃除、雇い主の世話などの家政婦の仕事を、廖秀珠は五十年近くも続けてきた。

それよりも彼女が力を尽くしているのは弱者家庭の訪問ケア活動である。その過程ではいろいろな困難にぶつかるが、相手によってケアの方法を変えることを知っている。

相手が心を許してくれない時も、彼女は相手が心を開いてくれるまで、忍耐強く付き添う。

◎文・呉珍香／訳・済運／撮影・徐啓衡

●汐止に住む慈済のケア対象者である陳さんは病気が絶えないだけでなく、4人の子供のうち3人が知的障害を持っており、家の掃除もできず衛生状態のよくない家に住んでいる。廖秀珠（左）はボランティアと一緒に清掃、整理に行った。

（撮影／林宏謀）



「訪問ボランティア 廖秀珠」

1953年生れ、1997年慈済委員の認証取得

訪問ボランティア歴：26年

訪問時の秘訣：自分はあまりしゃべらず聞き手に徹する。家族に奉仕する心構えで尽くし、ケア対象者に人生は愛に満ち、困難がないことを感じ取ってもらうこと。常に善に解釈し、包容、感謝、足ることを知る「慈済の四神薬膳」を使い分ければ、困難に出会っても乗り越えることができると思っています。

夜中の三時過ぎ、廖秀珠は腹部に激しい痛みを覚え体を丸めた。救急外来の医師から卵巣腫瘍と診断され、すぐに手術するよう言われた。

「手術台の上では身動きできず、なされるがままに任すしかありませんでした。気が気でなく、怖い思いをしました」。

廖秀珠は、慈済に参加してボランティアになったばかりなのに、「天は私を連れ去ろうとでもいうのだろうか？」と思った瞬間、彼女は無常とは何かということと、「人生は使用权があるのみで、所有権はない」という言葉の意味を悟った。病床での自分には裁量権がない。手術が

成功し、健康が回復した時には全身全霊で菩薩道に精進し、奉仕することを敬虔に誓った。

台北で家政婦となり 恩人に出会う

一九九四年、突然やってきた病氣は廖秀珠に、真剣に将来の道を考えさせた。手術後の休養期間、しばらく仕事をしなかったため、花蓮で慈済ボランティアになる機会に恵まれ、経験豊富な顏恵美姉姐（シージェ）と共に家庭訪問を行った。あるケア対象者は、元々、行動が不自由で杖を

使って歩いていたが、口腔癌を患ってもタクシーの運転手として一家を養っていた。

廖秀珠は「人間には無限の可能性がある」ことを悟った。やる気さえあれば、何にも打ちのめされることはない。台北に戻った後、彼女は訪問ボランティアを乗せてケア対象家庭を見舞うために、車の運転免許証を取る決心をした。その後、願いは叶えられ、「おばさん運転手菩薩」というあだ名をもらった。

貧困と病は廖秀珠にとって無関係なものではない。十二、三歳の時から家計を助けるために、小学校を卒業した後、家



●廖秀珠は家事手伝いや家の清掃の仕事に就き、夫の林富裕は工場で勤勉に働いて一家を養っている。一家4人は貧しいなりに楽しく暮らしている。

事手伝いの仕事に就き、その後、故郷の宜蘭県羅東を離れて台北に来た。雇い主は台北市合江街の町医者で、彼女にとっては親代わりと同じだった。人や物事に対する処世術を教え、それが彼女の人生に大きな影響を与えた。雇い主の韓医師の家庭は裕福だが、生活は儉約したもので、書道に使った紙を裏返して使うほどだった。この時に教えられた「衣類を大切にすれば着るものがあり、ご飯を無駄にしなければ食べる物がある」という言葉は、彼女の一生で役に立つものになった。

一九八九年、廖秀珠の姪が結核性脳膜



●廖秀珠は花蓮に向う汽車の中で、大衆に慈済を紹介し、自分の経験談を話した。1990年、一家全員が慈済ボランティアになり、家庭訪問、リサイクル活動、病院ボランティアなどに積極的に参加している。

炎を患った。病状は重く、昏睡状態で台湾大学病院に転院した。当時はまだ健康保険がなかったので、家族は入院の莫大な費用に悩んでいた。しかし、たまたま慈済ボランティアが隣の病床を見舞いに来た時に、彼女たちの苦境を知り、二万元の支援金を提供してくれた。そして、政府の補助とキリスト教会の寄付を合わせて、この難関を乗り切った。

廖秀珠と弟は、慈済ボランティアとは何の面識もなかったのに、すぐに支援してもらったことで、その慈悲に感動し、自分も善行して人助けすることを誓った。廖秀珠は定期的に寄付して《慈済道

●2009年の台風被害で、経験豊富な廖秀珠（右）は南部へ災害支援に行った。

侶」という隔週発行の新聞を購読し、慈済のラジオ放送を聞いた。また、花蓮静思精舎の常住師匠たちの「一日働かねば、一日喰わず」という精神に一層感動し、これこそ参加に値する慈善団体であると確信した。

二〇〇三年、夫の林富裕が胃がんを患った。二度目の難関の訪れによって、生命は呼吸の合間の一瞬にあり、最後の息が吸えない時がこの世とお別れなのだと悟った。それ故、善行するものもこの時しかなく、待つていられないのである。



家庭訪問では いつも貧困と病の関係を目にする

廖秀珠は二十数年の訪問ボランティアの経験がある。この間、病のために貧困に陥ったり、貧困故に病が重くなるケースが多いことを目の当たりにしてきた。中にはびっくりするような境遇の家庭があり、とても見捨てることができない。

中枢神経がブロックされて、いつも目眩を覚える李さんは五十一歳だが、三人の娘がいて、次女は精神疾患を患っている。夫が鼻腔がんで亡くなってから十年余り後、思いも寄らず、最愛の長女が末

期の胃がんに罹り、大量に吐血した。

娘の治療のために家を担保に二百万元借金したが、ローンを返済する能力はなく、家は差し押さえられてしまった。諸々のストレスに耐え切れなくなり、人生の無常を悲観して薬で自殺しようとしたが、幸いにも命は取り留めた。次女は鬱病が再発し、薬を大量に服用したことで亡くなり、長女も病に打ち勝つことができず、二人の娘がたったの六日間にこの世を去った。

李さんは知的障害のある末の娘と二人で生活しているが、運命の神様は難題を出し続けた。その娘も健康状態がよくな

●ケア対象者の李さんは病気のために生活が貧しくなり、長女は胃がん末期で痩せ細って病床上に臥していた。 廖秀珠（左から2人目）は他のボランティアと共によく見舞いに行った。

く、姉がキーマセラピーを受けて苦しんでいたのを見て、西洋医学を信じなくなつた。

慈済ボランティアが訪問すると、李さんは話を続けるうちに必ず泣き出してしまふ。しかし、ボランティアは彼女を抱いて慰め、思い切り泣いた後、彼女は再び生きていく勇気を出すようになる。慈済ボランティアの訪問は彼女にとって最も心温まる拠り所なのである。慈済の長

期に渡るケアと支援の恩はいつになつたら返すことができない。ボランティアは、家庭が落ち着き、余力ができた時に世の中に恩返しすればよい、と彼女に安心するよう諭した。

長女はかつて、いつか母親が他の人のために奉仕し、上人の慈悲と慈済ボランティアの愛に報いる日が来ることを願っている、とボランティアに話したことがある。彼女が亡くなった後、遺言通りに遺体を医学部の研究に寄贈した。

廖秀珠によると、この案件は二〇〇二年に始まり、二年半付き添った後終了した。病と苦難に苛まれたその一家のこと



を彼女は今でも忘れることができない。

慈済の訪問ケアは情報を聞き、訪問して目で確かめることができれば、精一杯支援をします、と廖秀珠が言った。ボランティアはケア世帯の拠り所となつて、彼らが苦しみから解放され、プレッシャーがなくなれることを願っている。

人は自分の価値を決めることができる

廖秀珠によると、慈済の慈善活動から得た最大の悟りは「苦を見て福を知り、貧を見て足るを知る」ことである。

「世の中で最も大きな力は愛であり、人間同士のわだかまりを取り除き、互いの距離を縮めることができる」。二十六年間、訪問ボランティアをしてきたが、案件の家庭はどれも苦しみに喘いでいた。縁があつて支援する機会に恵まれたのであり、奉仕できる機会を与えてくれたことに深く感謝すべきだ、と廖秀珠が言った。

この世の病の苦しみを見て手を差し伸べることは福を造ることである。さまざまな人生を見て悟れば、智慧は成長する。訪問ケアの仕事は福と慧の双方を修行するもので、「外見は奉仕しているように

見えますが、一番多く得るのは自分なのです」と廖秀珠が言った。

どんな人に対しても相手の身になって、真心で接するべきである。とくに悲しみから立ち上がれない人にはより多くの時間を割き、忍耐強く付き添っていかなければならない。善意で人を支援する時、まず相手を尊重し、要求を理解して初めて有益に支援することができのだ。互いに交流する時も上人の法と静思語を多く活用すべきである。「言葉を少なくし、良い言葉を選ぶ」。良い言葉が多く使い、聞き手に回ることである。

「相手は私たちの一言で悲しみから抜

●病気の苦しさを知り、無常を体験した廖秀珠は、日々の善行を大切にしている。病院ボランティアに関する地域研修会では、ボランティア活動に際して注意すべき事柄について説明した。（撮影／宋明章）



け出し、人生が変わって、楽しい笑顔を見せるかもしれません。これが長年、私が慈善活動を続ける理由なのです。訪問に出かける度に、必ず胸いっぱい喜びを持つて帰ってきます」

哲学者のサルトルは、「私たちが決めたことは、私たちを決める」と言っています。即ち、「人の存在は自分が自分を造り出していること」にあり、人は自分の次の一步を決め、自分の価値を決めることができるのである。廖秀珠は慈善に投入して苦の中から真の意義を求め、人生に無私の奉仕をする価値を見出した。

（慈済月刊五九八期より）

強い意志で 欲念を克服しよう

欲念を調伏して生活を簡素化し、地球を保護すれば、人々は安穩に暮らせる。志気を以て欲念を克服しよう。

地球温暖化による極端な気候変化は大きな災害を絶えずもたらしています。朝会の時、上人は、「人類はこの地球の資源に頼って生きていますが、一方、環境

◎文・釋徳侃／訳・心嫺

を破壊して大地を傷つけていることも事実なのです」と指摘されました。

「世の中のすべての形ある物は有限の資源です。いつかこれらの資源も使い尽くせば、それは地球が壊滅することにも繋がっていくことでしょう。それなのに、人間は浪費によって環境を汚染し、その悪影響が拍車をかけていることは目に見えています。もし平穏な日々を長続きさせたいければ、人々はもつとこの大地を愛し護るべきではないでしょうか」

「菜食をし、簡素な生活を心がけて実行すれば、地球温暖化を緩和するのに効果がある」と科学者も立証しています。

ですが、道理は知っていても決意を堅く持続する人が少ないようです。マレーシアに住む五歳の陳宋豪ちゃんは、幼稚園で「野菜の国バスポート」という一カ月間の菜食活動に参加しました。ところがある日、ちよつとした不注意でお肉を口にしてし



まいりました。罪の意識を感じて悔しい思いをしたので、その日のチェックのマスに「×」と書きました。そして新たに願を立てて、活動が終わっても引き続き菜食に努めようと決心したのです。家の人も宋豪ちゃんに合わせて菜食を今もしています。

「五歳の幼児でさえ自分の意志を貫いているのですから、大人はなお志気を高めて食欲に負けないようにと願っています。ご馳走を食べたいと思う欲望を抑え、生活習慣を変えれば、大地を護って平穏無事な生活ができるようになるでしょう」

一念の初心を永遠に

花蓮慈濟病院は八月で創業三十周年を迎えました。十三日と十四日に「愛の医療三十年 初心を忘れない」と「心の故郷に回帰しよう」をテーマとした祝賀活動や競技を行いました。

「三十年間医療事業を今日まで続けてこられたのも、当時あの一念発起があったからでしょう。そして諸々の因縁が合わさって成し遂げることができたのです」。上人は、土地探しから建設資金集め、そして医療スタッフの招聘まで、病院の建設計画中に生じたさまざまな困難を回顧なさいました。「幸いに、どのような難関に直面しても、いつも助けてくれる人が現れて、乗り越えることができました」と上人は感謝されました。

医療や建築分野の専門家たちに無償で協力してもらっただけでなく、また大勢の慈濟ボランティアも病院の建設基金を集めに奔走したのです。上人は、高愛さんの例を挙げられました。高愛さんは経済的な余裕がないのに、野菜や果物を行商する傍ら、慈濟病院の建設費に寄付するため、早朝には「華中橋」という橋の清掃婦の仕事を九年間も掛け持ちしました。八十歳を過ぎた在今も、休むことなく積極的に慈濟の活動に参加しているのです。「まだまだ元気です」。



微力ながらも尽くしたいと思いますよ！」と高愛さんは言いました。

大勢の古参ボランティアは、若い頃からずっと慈済志業のために尽くしてきました。「たとえ路上で転んだとしても、立ち上がったら身についた砂を払わずに、病院建設のセメントに少しでも加えたい」と言っていました。「ですから慈済病院はセメントだけではなく、慈済人の心血を注いだうえに完成したのもとも言えるでしょう」

台湾には無数の愛と善があります。上人は、「このような愛が満ちた病院を大切にし、そして現在台湾にある六つの慈済病院が心を一つにして、互いに協力し合って、素晴らしい慈済志業を永続させましょう」と医療志業に携わる人達を励まされました。

生と死は縁に任せる

あるボランティアは働き盛りの息子を病気で亡くしました。わが子の死という悲運に打ちのめされていた母親を導くため、上人は、「すべては因縁であること」と仏典の物語を語られました。

ある商人は馬車に荷物を載せて城内へと急いでいました。ところがあと三里の道程というところで馬が足を止めてしまい、前へ進まないのです。途方に暮れた商人は、別の馬と取り替えて引き続き城内に向かって行きました。その日の夜、寝ていた商人はあの足を止めた馬の夢を見ました。夢に現れた馬は次のような話をしました。「前世ではあなたは靴職人でした。ある日、一足の靴が盗まれたことで怒りが抑えきれず、『あの靴を盗んだ泥棒は、来世に百里の道程を私に返さなくてはならない』と罵



りました」。こういう訳で、当時の泥棒がその馬で、靴職人が商人とのことでした。「私があなたに返すべきものはその百里の距離だけで、足を止めたのも当然です」と馬はさらに言いました。

弁済はもちろん、恩返しも同様です。親と子の間で、もし恩に報い終えたら、母子の縁を終えなければならぬでしょう。「人には皆それぞれ因縁があります。生と死とは自分が予期できるものではありません。息子さんはこの世の縁が尽きたのだから、あなたが煩惱を断って初めて、息子さんも安心して自由になって行くべき所へ行つて楽になれるでしょう。これこそが真の済度なのです」。母親が気持ちを切り替えて息子を祝福すれば、亡くなった息子も安らかになり、次の人生へと進むことができます、人々に好かれる子に生まれ変わることでしょう。

「人間はあの世へは何も持つて行くことができず、ただ今世での果報が身にまわり着いていくのです。前世の善悪の行為に

よつて報いを受けるために、現世で自分の思い通りにいかないことがしばしばあるのです。仏法を聞き、菩薩の修行の道を歩むと決意し、努力しなければなりません。人々と良好な人間関係を築き、自分なりの生き方をしっかりと守りましょう」

(慈濟月刊五九八期より)

靴を失くして

◎文章・李淑慧／訳・翁俊彬

仏堂に入る前に、私は靴を置いた場所をしっかりと覚えておきました。

しかし、仏堂から出たら靴はなくなっていました。

私はすっかり食欲を失い、何回も何回も探してみました。

たかが一足の靴ですが、それがなくなったことで私の心を掻き乱されてしまいました。

八月中旬、花蓮の静思精舎に帰り、三日間医療ステーションでボランティアをしました。二日目のことです。早朝のお勤めと上人の説法を聞いた後、食事の時間を知らせる板を打つ音が鳴り響き、ボランティアは皆一緒に急い

で食堂に向かいました。朝食を済まし一日の活動を始まります。

下駄箱へ行き、皆と一緒に行動しようと靴を履こうとすると、靴が見つかりません。シールを貼った靴を、名札をつけた靴袋に入れたのに、見つからないはずはないと、すっかり焦りました。仏堂に入る前に、靴袋を二本目の柱の下に置いたのをしっかりと覚えておいたのに、その靴はどこかに行ってしまった。

あちこちを探しに走り回りましたが、どうしても見つからなかったのです。取りあえずスリッパを履き、急いで食堂に入りました。急いで戻って探さなければと、靴のことにばかり気を取られて、朝食は何も味がしませんでした。饅頭まんとうを一つ食べるとすぐに席を立ち、食堂を後にしました。

医療ステーションに戻ってみると、ボランティア朝会がすでに始まっていて、證嚴法師の説法がスピーカーから流れていました。私はやはり落ち着か

ず、もう一度下駄箱に戻りました。靴を間違えた方が戻してくれるだろうと期待していましたが、何回繰り返しても無駄で、最後は絶望した気持ちになりました。

古い靴をあきらめて、この機会に新しいのを買おうかと思ってみたりしましたが、私の大きなサイズの靴をいったい誰が気に入ってくれたのだろうか、と悩みは頭から離れませんでした。

午前十時を回ったころ、さすがに靴を間違えた人はもう返してくれただろうと思い、もう一度靴がなくなった場所に戻り、下駄箱を入念に探しましたが、やっぱりありませんでした。もしかして大殿の前はないだろうかと思いつきました。

コーナーにある知客室を回り、大殿に近づいて見ると、地面に靴袋が一つ、名札を裏返しにして、寂しそうに置かれていたのを発見しました。しゃがんでその名札を裏返してみると、やっぱり私の靴袋で、とても嬉しくなりまし

た。

靴入れ袋を手に取り、ゆっくりと医療ステーションに戻って歩きました。不安で一杯だった心はやっと落ち着きました。

「やっぱり自分は凡人だ」と自分に言い聞かせました。たった一足の靴なのに、なぜこんなに混乱してしまったのでしょうか。

静思晨語で證嚴法師がおっしゃった説法、「法空寂一切相」を思い出しました。全てを「空」にすることだという教えです。これによって心は明らかになり仏性が見えてくるのです。仏性が見えなかったら、我々の心は煩惱に煩わされ、絶えず外的な煩惱に縛られて、自由自在ではいられないどころか、他人を救済することもできません。

この時点で私は理解した気がしました。たかが一足の靴に、私の心は捕られてしまいました。命が終わろうとしている時に自在でいられるのは、全ての「我執」を捨てている時です。あの日が遠くならないことを期待して、今

一刻一刻もそれを大切に、生きていきたいものです。

＊注：二〇一六年八月の中旬、證嚴法師が靜思晨語の時間に《法華經・法師品第十》の經文を解釈されました。「大慈悲を部屋にして住む、柔軟忍辱を衣にして着る、諸法空性を席にして座る、此処にて說法する」。そして「慈悲より全ての善が生まれる、柔らかい和氣が全ての悪を防ぐ、諸法空性が全てを静める」と語りました。日常生活の中で、「慈悲、忍辱、空性」の三つの法を用いて、自他に利益を持たすように励ましてくださいました。

どんな事に出会っても心には必ず「大慈悲」を抱き、どんな逆境に置かれても「柔和忍辱」を身から離さないようにします。心を清らかにし、障碍をなくし、執着から脱け出して無明を作らず、最も純粹な真理——「靜寂清澄」に帰りましょう。

慈濟大事記十一月……………

訳・濟運

10・28

◎慈濟インドネシア支部は10月28日から30日までボタン島ブデイケムリアン病院で114回目の施療を行った。タンジュンバライカリムンとタンジュンバトウ、タンジュンピナンの住民492人に白内

	イ、ソニトンウル、リンコンボンガン、モンコウ、パンボン2村、パンボン3村などの山間部で往診し、延べ2426人を診察した。 ◎カナダ、サリー市の慈済ボランティアは「サリーホームレスの家」で冬季配付活動を行い、126枚のジャケットと132人分の日用品パックを配付した。 ◎慈済アメリカ総支部とラスベガス支部はラスベガスサルベージンアーミーセンターで2016年下半年の歯科の施療活動を行った。101人が診察を受け、無料散髪と衣類の配付も行われた。 ◎中国江蘇省塩城市阜寧県孔蕩村は今年6月に竜巻に見舞われた。慈済慈善事業基金会は現地自治体と協力して、30日に慈済蘇州志業パークで「塩城阜寧孔蕩慈済大愛村支援建設合意書の調印式」を行った。慈済慈善事業基金会の副総執行長、林碧玉と塩城市阜寧県議員常務

10・30	◎北区と東区の慈済人医会から50人の医療人員が創世基金会台東支部を訪れ、33人の寝たきり患者に口腔衛生ケアを提供した。 ◎慈済マレーシア・クアラルンプール支部とアビ連絡事務所は合同でサバ州コタマルドゥで施療を行い、サンバリタ小学校とサンバリタハ	10・29	中国深圳の慈済ボランティアは深圳市の環境衛生事業で働く労働者を対象に冬季配付活動を行った。宝安、南山、坪山新区などで、住民の生活状況を調査し、230世帯を訪問した。	障、脱腸、腫瘍などの手術を行った。 ◎静思書軒は28日と29日、「秋・心の灯」お茶会イベントを開き、茶道の講座を通して静思人文を広め、来場者に心の安らぎを体験してもらった。
-------	--	-------	---	--

			委員会、政法委書記である丁政萬が出席して調印した。
11・01	「2016年慈済海外養成委員慈誠精神研修会」が1日から14日まで3回に分けて板橋、三重、新店及び台中静思堂で開かれ、29の国と地域から2500人以上のボランティアが参加した。	花蓮慈済病院と慈済ベトナム支部は国際医療衛生面での協力することになった。診療、人員の訓練、学術研究の交流などで協力し、この日、林欣栄院長と支部責任者の陳大瑜が板橋静思堂で合意書を取り交わした。	11・02
11・03	◎慈済フィリピン支部は3日から6日までダバオ市で第250回目の施療を行った。フィリピン、マレーシア、台湾の人医会メンバーが外科、	◎慈済フィリピン支部は3日から6日までダバオ市で第250回目の施療を行った。フィリピン、マレーシア、台湾の人医会メンバーが外科、	11・03

		眼科、漢方医科など6つの診療科目で延べ6440人を診察した。	
11・05	◎フィリピン慈済ボランティアは現地のお墓参りの風習期間中（10月30日―11月3日）にケソン、マニラ、サンマテオなど6都市の10カ所の墓地で7回目のリサイクル活動を行って環境保護を訴えた。この5日間に延べ1500人の住民が日雇い方式で参加し、32トンの物資を回収した。	慈済マレーシア、ムーア支部は5日、12日、13日にセコラ小学校、ジョホール・チミン第2小学校、マコバキリ公民館、バンタムルナンタムタム小学校で581人の生徒に奨学金を授与した。	11・06
	◎慈済アメリカ・ニューヨーク支部は初めてブルックリン区役所と合同で地域社会健康の日活動を催し、住民に歯科、漢方医、物理療法リ	◎慈済アメリカ・ニューヨーク支部は初めてブルックリン区役所と合同で地域社会健康の日活動を催し、住民に歯科、漢方医、物理療法リ	11・06

11・12	ハビリなど多科目に渡る医療相談を行った。 ◎慈済アメリカワシントン支部は赤十字社と合同でノースカロライナ州ランバートンでハリケーンマシューの被災者252世帯にシヨツピング用カードを配付した。
11・12	◎大林慈済病院は年に一回のターミナルケア病棟患者の家族ピクニックを行った。腫瘍科、ターミナルケア病棟、がん患者ケアボランティア、ターミナルケア医療チームなど70人が、景観地で青竹踏みをしたり、慈済雲林支部でストレスと悲しみを和らげる講座に参加した。 ◎北区慈済人医会は新北市三峽区有木小学校の要請で、初めて当学校の開校記念日に施療を行い、山間部の住民に奉仕した。 ◎台中慈済病院の医療人員が往診活動を行って「医師の日」を祝った。

11・20	慈済の訪問ボランティアと社会福祉人員が5組に別れて、潭子、豊原、苗栗等で病人や弱者家庭を訪問した。 ◎慈済アメリカ総支部は「大愛野菜果物カー」計画を始動し、弱者家庭の学生に野菜や果物などの生鮮食品を配付する活動を初めて南カリフォルニア・サンバナーディーノインディアン学校で行った。 ◎14日、ニュージーランド・サウスアイランドでマグニチュード7.8の浅層地震が発生し、海沿いの町カコーラが大きな被害を蒙り、住民と観光客はスペンサー公園レジャーセンターに避難した。慈済ニュージーランド支部のボランティアは20日、被災地の避難所を見舞い、飲料水と毛布、食器を住民に提供した。
-------	--

慈濟

2016年12月19日発行・240号

中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄

Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈濟基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路2号

編集 慈濟日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・張涵

校閲 山田智美

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9920

E-mail: 019874@tzuchi.org.tw

慈濟基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈濟に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本文への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただければ幸いに存じます。（日文組編集同人）

師匠、私は敬虔に拝仏したり、念仏する気があるのですが、どういうわけか仏を拝むと別のことを考えたり、念仏も長く続かず集中できないのです。いつも確かにお経をあけていて、目は経文を追って口は経文を唱えているのですが、心がそこにならないのです。



こういう問題は誰にでもあると思いますが、どうしてそうなるのでしょうか？心が統一できない為に智慧も必然的に開かれないわけです。私たちが仏法を習得するのは聡明になりたいからではなく、智慧を習得したいからです。智慧は落ち着いて初めて生まれるもので、もし心が集中できれば、事の道理が解るようになります、それにつれて智慧が生まれます。

例えば、念仏する時は仏の心が自分の心となるまで、そして、お経を読む時はあたかも仏の前で仏自身から説法を聞いているが如く、文は目から、声は耳から入り、心で道理を理解して初めて本当の智慧といえるものです。

それ故、仏は弟子たちに心の養生を教えました。心を一つにまとめることができれば、心を静めることができるようになります。

訳・済運 絵・蔡志忠／彩色・慮扶
訳・済運《清らかな智慧》より